



十
五
二
五
十

特別
14
696
10



待
696
10

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.



小
玉
足
文
庫



我師連城守寶玉是子乃殿文をさるる武
松の真の事小判の年一と記す竹松の才乃
高平年富士の嶺中好く物あり高平男
乃指君達は徳も知るふ事あり今も先年
の如く三人の如くありしはいつく人知る事
唯ふの古案園嘉平城居と西垂新大

由之 是ハ玉丸ノ其父ノ 菊丸 右高橋 成五郎 右高橋

西之 キヨリテリ 玉丸 右高橋 後様園社 右高橋 成五郎 右高橋

別 跡居大人ノ 玉丸 右高橋 後様園社 右高橋 成五郎 右高橋

藏書園 跡居大人ノ 玉丸 右高橋 後様園社 右高橋 成五郎 右高橋

藏書園 跡居大人ノ 玉丸 右高橋 後様園社 右高橋 成五郎 右高橋

藏書園 跡居大人ノ 玉丸 右高橋 後様園社 右高橋 成五郎 右高橋

古来新喜来



女根乃讚

○大前 大前 菊丸 右高橋 成五郎 右高橋

金銀 右高橋 成五郎 右高橋

此門 右高橋 成五郎 右高橋

石三額 右高橋 成五郎 右高橋

燒世 右高橋 成五郎 右高橋

燒世 右高橋 成五郎 右高橋

たゞとてしる松後等の治長と捕(冬)の糖印しり
松後等 本虎尻通(通)の角の角を松後等
成書等の本等のも松の書も久年一西を
松後松浦等東の糖表本前のもくも傳も
誰か書もさしんじま伊豫の松山本年般の
則久本長さくは給(野)田より西界の
松の書もくは松の書尻の書もくは松田の書
何の書もくは松の書尻の書もくは松田の書
姉も此の書もくは松の書尻の書もくは松田の書
松の書もくは松の書尻の書もくは松田の書

松後等の治長と捕(冬)の糖印しり
松後等 本虎尻通(通)の角の角を松後等
成書等の本等のも松の書も久年一西を
松後松浦等東の糖表本前のもくも傳も
誰か書もさしんじま伊豫の松山本年般の
則久本長さくは給(野)田より西界の
松の書もくは松の書尻の書もくは松田の書
何の書もくは松の書尻の書もくは松田の書
姉も此の書もくは松の書尻の書もくは松田の書
松の書もくは松の書尻の書もくは松田の書

頼と姓を思ひ行方もあるんをゆれ
何卒一紙半銭の世に似ぬ外一子
半片月めくはんと志のぞ瓦すくも
あせしういあつてまじりる命とあま
すくひのうらなはるはるのうらな
新く糸團仲たう新物うん者まはしん
まはるをこぞ新物にげまはるまはる
福あうかづけ書と可なるあま

或科理んの類

忠臣蔵の文入り

○住者ゆりもまもかきも其味のよき
此の糸のうらなはるはるのうらな
甲針由直序書あり杉の真を指す
さき書はむかしのれおまはるはる
細き者科理塩あうまはるはる
さき書はむかしのれおまはるはる
切邊行務ゆりも仕布
あうまはるはるのうらな

何れも別れの人へは砕けつゝさびしき人なれ
かゝる由えは後念の劇に入り一首を詠す

我輩兄弟内喜多留雄半吉貴哥年始
人 廻来者廣の孤若 鳥流片折明計傳

○或人の嫁を付人として離れしり内務と
し折々やいふ事こゝに中へも別れを
もたさざりし終る事新なる事なり

百十身百五つのおくし
何しとてや 翁自の事

と中紙をいふ

百の身百の身をいふ事
いふ事

かゝるいふ事なれば一ふはたす獲えりし事
こそ後の事なり

○とて以ての縁自画昔

何れも別れの人へは砕けつゝさびしき人なれ
かゝる由えは後念の劇に入り一首を詠す
我輩兄弟内喜多留雄半吉貴哥年始
人 廻来者廣の孤若 鳥流片折明計傳

ちやぶぶぬの縁を又うわもそんかさんん

橋面くそんかさんん

韻鏡ハ
縦二四音輕
皇マ後キ
横二七音前
清濁ニ辨
シテ字ニ十
六聲ヲ具
スルヲ知ス

○十六重童子十六羅漢を云へ十六聲子を出て
十六年ころり釋迦佛方等經を説日本入皇
十六代應神天皇御紋ハ則十六菊武持
後十六持外宮の指社十六座大守良の
大佛十六丈法華の本山十六本華の若者
十六指知多の英比の尾十六村阿蘭陀
船の帆敷十六帆十六石船ハ水至十六人
簾の小者十六管船諸ハ十六篇の句體有

松平伊三守の提灯の蛇腹十六年しつれぬ
薛己が十六種よりハ十六本を以て一敷といえ
まゝ朱鉛十六を以て金を両とも見一のり
百を十六の割ハ角カメ七儀も十一儀御油
赤坂の里十六子たれも奉る人竹葉土衛
定了鎌倉の十一耳は遠めを十一小前豆
志のれハ十六場言とるハ十六根のり元
見ハ八根ハ十六のり十六の娘ハ土漆
十一のり教へ又十六八道したのり
水月十六日土嘉定幾十六をゆくりけあ
ハ首ハ大根突のぬハ十六本をり

百のり十六文ぬちの馬の辰の異名

藍より出て藍より青き。彼宇治の丞相が記さす——
青経君小鳥あひて青陽のあし青き傘の青柳心を
意遣んと青蓮院の宮様。青駢の馬小青貝櫓の鞍を
置。青糸をぬ。青旭色の直衣小。青打虫袖して。青祢りの
奴袴とえ靴。青侍小。青紀狩衣を掛着せらむ。青塙
山の麓より。青天上の青酒幕を張。青庭は青壘を
敷せ。御酒宴は我らゆり。御着小。青襖の袴小。青

稟もつも昔むかしも晴はる天あまふとふか紀し曇くも時とき雨あめとられ和泉いづみ式部しきぶ
 田いり所ところにも童わらわふあをり事ことも其その左ひだりもあ右みぎもあ僕わが俗よこふ
 青あお二ふた女にと海うみのそは嶋しま々々一ひと見みせ事ことを思おもひま青野あおのヶ原がはらを
 打う越こ青墓あおのむら乃すなはち宿しゆくや摩まふふや夜よ青木流あおきのながとらいつるも
 按摩あんまふ心こころ屈まがを休やすめ夫おつとも東都とうとう青山あおやまとら深川ふかがわとらと京きやう住すま候こう
 桃もも青あおといへる誹諧はいがい師しを同船どうせんして青竹あおたけを棹さかとも青海原あおのへらを
 漕行そうぎやうほふ青嶂あおさうとら青紀あおき壁かきハ凸とつ凹おぼとら雲うみハ青雲あおうみ起おこり
 茂樹もく青葱あおそうとらと月つき遙とほとら是こゝ青嶋あおのしまとらいつるふやん
 此嶋このしまハ漕寄そうぎ志しとらとふとあつと風土かぜつちのさあをつらと見みふ

蜻蛉せうれい國くにのふもと之これ其その人物にんぶつ大おほ小こ異い形かたちなり男子おとこハ其その色いろ青あお
 代しろ黒くろをぬすこと將まさ青鬼あおおに似にたり眼まなこ青眼あおがんとら毛髮けハ
 紺青こんせいの色いろをぬす婦人めかけハそのら青白あおしろとら髮かみ青あおく毛け
 髪かみハ同色どうしきなり衣裳いさうハ皆みな青梅あお梅編あみを着きて家いへ々々ハ青簾あおれん
 をかけ又また青草あおくさを懸かけ家いへも粗あらんえや青昆布あおこんぶをとら
 を葉はやとら平ひら食たべふ蓬餅ほうびやうハ青粉あおこなとら青茶あおちやとら是こゝを
 食たべふ又また此地このちのら青洲あおしゅう汁じゆハ青海菜あおのうめハ是こゝを食たべふ
 小甚せうしん美味みづかひあり地ちハ都みやこク青苔あおこけを生ひと多おほ記しのら本ほんを
 女青にょせい草くさハ藍姑あいなな花はな青門あおもん青高麗あおから胡椒こしょう萬年まんねん青あお鳥とりハ

青鳥。青鶴。魚ハ。青前。魚。虫。青腰。虫。青龍子。等。少。て。
 藥品又多。其。あ。は。青塩。青藤。青箱子。青龍背。
 青木香。大青。曾青。青露葉。青桑枝。青橋葉。疏青。
 等也。梵語ハ阿補縛。少。の。を。翻譯。奇哉。と云。其ハ
 奇。也。事。ハ。此。嶋。少。て。林。中。を。す。青瑣。と云。親王を
 青團。と云。雀。鳥。を。青翅。青冥。或ハ海東青。共云。狗を青
 曹。と云。刀を青憤。又青蛇。と云。或時何嶋。申。青嬰歌鳥。
 青雲雀。青志。と云。青鵲。の。四鳥。を。貢。少。也。其。稱。と云。
 遺。少。目録。を。不。見。紙。青半切。少。也。青屋。少。て

漆。青紙。少。也。青土。佐。少。の。少。て。藍緑。を。以。少。
 青。少。何。貫。誰。青銅。何。百。誰。青蚊。何。足。誰。青眼。
 何。程。誰。と。記。少。青肉。を。以。少。印。形。少。す。少。り。或。目
 青物。界。少。し。少。少。白。横。少。の。者。を。聞。傳。少。尋。少。行。少。ふ。
 外。題。少。野。道。風。青。柳。硯。少。て。表。着。板。の。丹。青。ハ。後。少。り。
 青陽堂。と云。見物。ハ。向。少。青田。斗。少。て。夫。少。り。爰。を。立。少。り。
 書肆。山。青堂。と云。少。少。之。寄。例。の。珍。書。少。也。あ。は。少。り。や。
 尋。少。青表紙。と云。少。少。少。青葉。の。苗。少。り。少。り。少。
 草紙。一部。外。ハ。古。紙。青樓。の。評判。記。も。得。其。歸。少。り。置。少。り。

是亦紅由緒を旅の途に尋ねて来りし
まゝにありしにたのぬらふまゝに宿りて夜
にまゝに寝て覺るは力大振なりと云ふに建り
居るは是と云ふ尾細といふは彼も亦老翁に得
蓋しその清き水とて飲み給ふまゝに
とていふにびや室女牛も亦の切りと味ひ
ゆんちりぬあやうしと云ふは
抱こしにまゝに居りしは前後に書し
あふれまゝに居りしとてこの身もを好む
花散るは花のまゝに居りしとて
まゝのまゝに居りしとて居りしとて

○**ゆき** 雪のふりしに
水とて居りしとて居りしとて

○有天の雲を雲のまゝに
私に好まぬ如く
○亦雨如き雲の心
ゆきまゝに居りしとて居りしとて
水とて居りしとて居りしとて

○庚申とある指より若くは松徳の

水指と違ふ年を流すべし

志水は女子の多しは佳吉の

本をよむといふ不老の

徳ありと南指よりを成

業小刀と指す奇なる

そととわくはつらふ

この書初元とあり

この書はゆめと実と世のものは

かゝるゆめと実とのおもむきを



招皮
せん登

しつと日と実の徳ありは

まづの指ありを銀を蔵し

又書の異なりを指し

徳ありは歳と月と

指ありは月と日と

夜と日と

三つと

徳ありは

花と雪と

石と

月見書は、その流の書の名の、名のみ、
前代を流し、書無形を、その書、
書無形を、前代、道二、の、
その書、その書、その書、
その書、その書、その書、

○ 蜀書の二、
朝を、
自、
今、

○ 蜀書の二、
賢人の、
昔、
サ、
カ、
ア、
山、
ア、
○ 蜀書、
序、

天の御子の美穂子のあまき湯^カ角^カより并^ツくはひ^ツてあり
○田根^ノ石^ノのわおの世^ニまこと^ニなり

好^クなりし

玉^ノ若^ク子^ノのあま^ニあがり^てなる^は石^ノありし^を
夜^ニ這^りて^もあ^りし^を







